

〔随筆・サロン〕

今市憲作先生から教わったこと

辻本良信*

大阪大学名誉教授今市憲作先生は、残念ながら2月16日早朝にご逝去されました。私は先生に助手として採用いただいて以来、いろいろなことを教わりましたができなかったことがほとんどなので、若い方にこれらのことをお伝えすることでお茶を濁したいと思います。

今市先生は私が学生のころから“かっこいい先生”として存じ上げていました。大阪大学には工学部、基礎工学部ともに(今は変な名前になってしまっていますが)機械工学科があります。その懇親のために年一回合同運動会をやっていましたが、先生は白いクラウンで颯爽とやって来られテニスやソフトボールで活躍され、みんな(特に女性)のあこがれの的でした。伊丹空港の社員食堂へCAさんとお近づきになることを期待して食事に行くと、先生はきれいな秘書さん(現在香月名誉教授夫人?)を連れて来ておられました。“一度遊びに寄せていただいて良いですか?”とお聞きすると“いつでも来いや”と快諾いただき、研究室の学生の部屋で楽しくお相手いただきました。

助手として採用いただいて最初の仕事はエンジンの性能試験に関する学生実験でした。植村

先生からその担当を引き継ぐと、基礎工では基礎科目が多くて機械工作や実際の機械についてあまり教えていない(あれもこれも教えるのでなく教えないことも大切!!)ので学生実験の中で話しているとのこと、私自身知ったかぶりをするために必死で勉強しました。2年目になって、何かが当たる音がするので調べて見るとエンジンと水動力計を接続しているダイヤフラムカップリングのゴムがへたってボルトがフランジに当たっていることを発見してしまいました。カップリング交換で済まそうかと思ったのですが、先生にお伺いするとこれを機会に一新しようということになり、ダイハツ様から一式ご提供いただけるよう、すべてアレンジしてくださいました。技官の方や学生にもお世話になって大きな遅滞なく入れ替えを済ませ、スターターを押したときに一発でかかった時の快感は何物にも代えられないものでした。このOJTにより、より完全な形で“納期”に間に合わせることの大切さやそれができたときの楽しさのほか、一通りの機械工作や実際のものに触る楽しさ、“やればできる”精神も教えていただきました。

基礎工学部は“科学と技術の融合によって新しい分野を切り開く”という理念のもとに理学部と工学部の先生が協力して創設されました。

*大阪大学 名誉教授
原稿受付日 平成28年2月26日

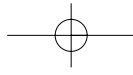
今市先生は工学の側からこれに積極的に取り組み、専門外とも取れる“機械要素”の授業も熱心に担当されておられました。これは、機械屋は少なくとも機械で教えることぐらいはすべて専門内と考えるべきべきとお考えだったからでしょう。“専門”は自分を狭めるという弊害の方が大きいのかもしれません。先生のおられたころの基礎工では、工学部出身の先生と理学部出身の先生がパイの取り合いでなく、それぞれお互いの“文化”を理解し尊重し、ともに新しい分野を切り開くというより高い次元の共通の目標に向かっておられました。先生のお蔭で理学部出身の先生にも親しくしていただき、我々は生徒や患者・信徒・有権者を信じ込ませる必要はないのだから、“先生”と呼び合うのはやめましょうと言っていたいただき、なるほどと思いました。私自身は無理に“融合”する必要はなく、世の中にはいろいろなスケールがあることを認識する方が大切と思っています。研究上はパンゲア大陸分離を地殻の固有振動で説明しようとされる一方、“設計の役に立つことをしなければ”と常々おっしゃっていましたが、これは理学と工学の違いを峻別され、無理に工学が理学ぶる必要はなく理学的な考え方も視野に入れたうえで工学としての役割を果たすことの大切さをおっしゃっていたのだと解釈しています。私自身心がけてはいましたが、なかなか“設計の役に立つ”ところまでは行けませんでした。

今市先生は勉学の面では“とんでもない”と思われるような学生も積極的に引き受けられ、その学生の長所を見つけて大切に育てておられました。最近では良くできる学生を囲い込みたくさんの研究費を確保したいというのが主流です。大学の評価は卒業生の絶対的な能力を基準にするのもいいですが、その機能から言うとその評価基準はやはり(卒業時の能力－入学時の能力)／かけた費用とするのが本筋だと思います。

先生は分子を大きくされましたが、私は結果的に分母を小さくすることに頼ってしまいました。

ターボ機械協会にあっては村上先生や鶴崎先生の協力のもとに、現在でも人気の高い“フレッシュマンセミナー”を始められました。また、その最初の教材として、ターボ機械の設計法に関する御本も書かれましたが、これは韓国語にも翻訳され今でもこれを設計の基準に使われる会社も多いようです。CaltechのAcosta先生も、式や図表を見られて“良くできた本だ”とおっしゃっていました。晩年ほとんどのものを処分されましたが、先生はお部屋に教授室の看板とこの本を置いておられ、ご自身も大切に思っておられたようです。なお、協会のシンボルマークは(本人は忘れておられますが)先生のお嬢様がデザインされたものです。

今市先生は時代の徴候を読み取る嗅覚にも優れたものをお持ちで、ターボ機械協会に関西地区委員会を作られたのも、産業界とアカデミアの協力が必要だとの強い思いからで、それが上記フレッシュマンセミナー事業に反映されています。また国際化の必要性にもいち早く着目され、文部省から経費を確保され、フレッシュマンセミナーにも使っている“国際棟”を植村先生の協力のもとに建てられました。また、この経費に付随してアメリカから4名の先生を招へいされました。私はこれらの先生の身の回りのお世話を担当させていただくことで、コミュニケーションで大切なのは英語ではなく伝えたいと思うこと(伝える価値のあるものを持つこと)、理解したいと思うことであることを学ばせていただきました。国際化の本筋は腰を据えて伝えるべきしっかりした中身を作ることに、国際化＝英語教育と勘違いする人が多いのはいかがなものでしょうか？



3 今市憲作先生から教わったこと…(3)

今市憲作先生から教わったこと…(3) 3

以上のように今市先生はネアカで楽天的、豪放快活なユニークな先生でしたが、根本は非常に繊細で人の心を思いやる優しい人でした。ケアハウスでお世話されていた方から“先生をされていた時はどんな先生でしたか”と聞かれこれを申し上げると大いに納得され、多くのスタッフがこんな先生を慕っておられました。これがお教えいただいた最後で最も大切なことだと思っています。

釣りのこと、車のこと、ほかにも書き出したらつきませんのでこれだけにしておきます。

今市先生、ありがとうございました。今後ともよろしくご指導お願い申し上げます。

